礒井 純充氏

未来型図書館つながるミーティングについて

山元 加津子氏

01 日時・参加者・次第

【日　時】令和4年2月20日(日)13時30分～16時00分

【参加者】46名

【次　第】市長挨拶 ▸ 対談・講演 ▸ グループミーティング ▸ 発表・講評

02 講師

礒井　純充氏(まちライブラリー提唱者／森記念財団普及啓発部長／大阪府立大学観光産業戦略研究所所長補佐・客員研究員／博士(経済学))

大阪市出身。森ビルで「アーク都市塾」「六本木アカデミーヒルズ」などを立ち上げる。2011年より「まちライブラリー」を提唱。本を介した人をつなぐ場づくりに関わり続け、現在は全国900カ所以上で展開している。

山元　加津子氏(映画監督／作家)

金沢市出身・小松市在住。元特別支援学校教員。国内外での講演や著作活動、映画製作など多方面で活躍中。ブックフェスタジャパン2021では礒井氏とトークイベントを開催するなど図書館づくりの活動も精力的に展開されている。

03 概要

はじめに、礒井氏より、本で人とまちを変える、本でつながることをテーマにした「まちライブラリー」について、人の顔の見える関係性をどう作っていくか、カフェやお寺、公園、小学校、家や街角、商業施設、公共図書館などでの千差万別に広がっている事例を紹介いただいた。その中で、本にメッセージカードを付けて寄贈し合ったり、蔵書０冊からの図書館づくりのため、様々なテーマで本を持ち寄ったワークショップ「植本祭」を行った活動や、一旦閉館となったまちライブラリーを市民運動により行政が復活させた活動などについてお話をいただいた。そして、個人が地域社会の主役になることができるということが一番であり、こうした形が小松で生まれてくることで、未来型図書館の一つのヒントになるのではないかと話された。

山元氏からは、みんなの幸せのために図書館がどういうことができるか、いつもここに来たいと思えたり、市民が運営に関わることができ、それに伴ってまちの活性化につながっていく視点が大切であるという話をいただいた。具体的に、一人一人が輝くために、図書館には複合的な機能として小さなホールや展示スペース、カフェなどが併設され、交流や学びの成果を活かす場、障がいのある方が働く場、本棚で自分の世界を表現することで人とつながれる場ができるとよいと話された。そして、企業活動との連携や、バーチャル空間を活用したアプリの開発による図書館利用の促進策、まちの活性化へのアイデア、伊万里市民図書館の図書館フレンズのように、市民が自分事として運営に参画できる組織などの紹介をいただいた。

対談では、図書館の不文律と言われる「静かにしなければいけない」「飲食をしてはいけない」という慣習について、半世紀の間で館内での閲覧方式から自由な貸出方式へと大きく変化しており、本を通じて議論や感想を述べ、楽しんだことを話せる場は、むしろ、公共図書館がすべき役割であり、さらに５０年後を見たときに、未来の図書館は何をすべきか考えた方がよい、図書館は本のある広場になっていくのではと話された。
さらに、図書館づくりは、施設ではなく、ムーブメントを作ることであり、公共投資により市民生活にどのようなインパクトが生まれ、各人が我が事として何を考えていけるかというプロセスを重視すべきと話された。

対談講演後のグループミーティングは、６グループに分かれ、参加者による進行のもと、「①自分の生活をより良くするために新しい図書館はどうなったらいいか」「②新しい図書館づくりを通じて自分がどのように関われるか、実現・挑戦してみたいこと」の２つのテーマについて議論を行い、発表いただいた。
礒井氏・山元氏からの講評では、今日のような活動は図書館ができるまで待つ必要はなく、こうした盛り上がった気持ちを無駄にせず、話し合いを続けていけたらよいとの提案で締めくくられた。
最後に宮橋市長より、図書館は、市民と一緒にまちづくり全体を考え、ひとづくり、教育の場を作っていく、未来の小松のあり方を考えていく、そうしたフューチャーセンターの機能を持っていきたい。そして継続的に未来型図書館を考える新たなパートナー組織を立ち上げ一緒に考えていきたいと挨拶があった。

04 参加者の声

・対談講演では、知の殿堂としてだけでなく、市民活動の場、人をつなげる場、居心地の良い居場所など新しい図書館のイメージがつかめた。
・グループミーティングでは、新しい情報や交流ができ、とても充実した時間を過ごすことができました。
・小松市の図書館にすでに関り活発に活動している方が参加していたので、小松市の新図書館への期待・関心が高いことを感じた。

グループミーティングについて

6グループに分かれて下記の2つのテーマについて
意見交換を行いました

※一部抜粋

①自分の生活をより良くするために新しい図書館はどうなったらいいか

役割

- 図書館を充実させることで学びを得ていく場に、生涯学習を推進するきっかけづくりに
- 子供だけでなく、大人も来たくなるようなイベントを開催し、そのような一つのきっかけから学びを広げていくことも大切
- センターや図書館、まちライブラリーが街のあちこちにあり学べる場所があると良い
- サードプレイスとしての役割が大切。誰もが使いやすい、ふらっといける場所に。思春期にも一人でいける場所。学校にいけない子も外に出るチャンスになるような場に。
- 地域のコミュニティの役割を担うことも大事

施設・設備立地など

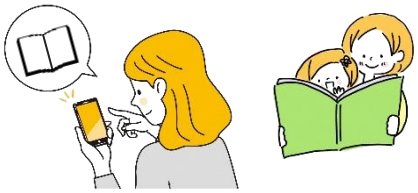
- 駐車場が近くにあると便利
- カフェのような飲食できる空間がほしい。待ち合わせとして使える場所
- 公園内にあると良い。飲食店や雑貨店等商店街とのつながりや街の活性化の起爆剤となるとよい
- 気軽に行って気分転換ができる場所。屋内駐車場など天候関係なくアクセスできる施設

その他

- 図書館をまち全体で考えていくことや自分との関わりについて考えることが大事
- 気軽に足がむくような場所になってほしい
- 一人一人の持ち味、特技がある。交流することによってつながりが生まれる

機能・サービスについて

- アプリ等の活用
- 読みたい本が読めるだけでなく、本のコンシェルジュ(キーワードからおすすめを選んでくれる)のような機能がほしい
- 誰もが様々なサービスを受けられる図書館であってほしい
- 地域の核になる図書館が良い。本を読むだけでなく、色々な会話などができるとか、結婚や出産をしていくなかで、心の成長や豊さを求めたい。絵本が豊富で、世界中の絵本があるといい。
- 小さな子から高齢者様々な人に使いやすいようになってほしい。
- 本との出会いも大事。みんなの心の中の本を発表する場、時間を見出すこともあるといい。
- 暮らしが楽しくなるような場に
- 動物と一緒に本をみたい(こどもたちの絵画作品の中にもあった)
- 自然がある雰囲気が良い
- 図書館には固定観念があり配架もその一つ。こどもと大人が同じ空間で使える配架の工夫も必要。
- 図書の配送・閉じこもりのこどもに本を届けるサービスも大事
- 屋上から桜を眺めたり、航空ショーなども見れたりすると良い
- 子供が騒いでも怒られない雰囲気に
- 家にある本を図書館で活用したり、ほしい方に活用してもらえるような仕組み
- 伝統文化など子供たちが体験できる場に
- 世代を超えた交流。人とつながる機能がある空間があるといい。
- 企業と学生が気軽に話せる場があると良い
- 本を読むだけでなく、ワークショップ、体力づくり、勉強できる、面白そうなことをやっている場所
- わくわくするような仕掛けがあると本に興味がなくても足が向くような施設になる
- 保育士さんに来てもらって子育て相談
- 親子が一日中過ごせる場所になるといい。
- ネットでは深追いできない事を見つけることができるのが図書館の魅力。小松の歴史がわかりやすいような紹介があるといい。
- 自分で作った本を発表できる機能があればいい。



②新しい図書館づくりを通じて自身がどのように関われるか、実現・挑戦してみたいこと

- 自分にできることがあれば関わっていきたい
- 伊万里の活動のように計画の段階から、市民が関わる場を作っていければ良いと思うし是非参加したい
- まちライブラリーの企業版を作りたい
- まちライブラリーのボランティア等にも参加してみたい
- いろんな人と意見交換がしたい
- 図書館サポーターを作る(サッカーや野球のような)
- 図書館を自分事として考えられる人を増やす
- 学校のPTA活動等で未来型図書館への推進につながるよう頑張りたい
- 言語に興味があり、オンラインで海外の人と毎日話している。図書館に行けば海外の人と話せるような機能ができれば、それをサポートしたい
- デジタル化ができていない資料をテキストデータ化するボランティアに参加したい